

2020年度 学校関係者評価報告書

実施日：2021年2月17日

2021年3月

独立行政法人国立病院機構

大阪南医療センター附属大阪南看護学校

学校関係者評価委員会

＜学校関係者評価委員＞：教育交流に係る連携大学 教授

看護専門学校（3年課程）教務主任

臨地実習施設の看護管理者

学生の出身高等学校の教諭

同窓会会長（卒業生）

## 学校関係者評価結果

◇令和3年2月17日 学校評価実施規程に則り、5名の学校関係者評価委員による評価を受審した。  
学校目標に対する自己評価結果を示し、目標達成と今後の課題や取り組みについて意見交換を行った。

学校目標Ⅰ 基礎的な看護実践力を身につけた学生の育成

目標Ⅰ-1. 看護実践能力の強化(看護技術力、アセスメント力、コミュニケーション力)

<取り組みと課題>

- ・看護技術評価の実施(車椅子移乗と移送、清潔・衣生活、感染予防の技術、バイタルサイン測定、静脈血採血、点滴静脈内注射)し、不合格の者は合格するまで技術指導および評価を実施し全員合格した。
- ・昨年度末の休校により、技術評価不合格者の再評価ができていなかった学生に対しては、学校が再開してから技術の練習時間を確保し、再評価を実施し全員合格となった。
- ・技術練習時間を時間割に組み込み、個別の技術練習時間を確保した。また、オリジナルの動画を作成し、学生が技術練習に活用できるようにした。これらの取り組みにより例年と同様の技術習得状況となっている。
- ・休校期間の学習・実習前研修として紙上事例を活用した看護過程の展開を行った。事例患者の病態や成長発達段階の特徴などを踏まえたアセスメントの必要性やアセスメントに必要な知識の習得に向けた指導を繰り返し行うことにより、実践にいかせるようになった。
- ・臨地実習において学生は多くの情報を収集しているが、それらの情報を関連付けてアセスメントする力が弱い。教員は学生個々の学習の進捗状況を確認しながら、課題の提示や学内での記録指導等実施している。
- ・通常は、様々な学校行事や病院ボランティアが模擬患者役となる演習を行うなどにより、コミュニケーション力の強化を目指していたが、今年度はほとんど実施できていない。教員が患者役となりコミュニケーション力の育成を意図した演習を行った。
- ・例年は、遅出教員を2名配置し、そのうち1名が放課後の技術練習指導を行う体制をとっていたが、感染防止対応のため早出教員を2名配置としたことや時差出勤を導入したことから、遅出教員の複数配置が行えず、時間外の技術指導ができていない。時間内の技術練習は主に担任教員が担当するため、少人数体制での指導や複数の教員が関与する指導が行えていないことが課題である。
- ・臨地実習の日数が減っているため、受け持ち患者や指導者とのコミュニケーション場面が減少している事に加え、学内での他学年との交流や同学年とのディスカッションの機会も減っているため、コミュニケーション力の向上に向けては何らかの取り組みが必要と考える。

<質問と回答および評価>

質問:昨年度までは、放課後等時間外で技術練習に取り組んでいたということだが、今年度は、時間内に練習時間を確保し、時間外を活用しなくても技術到達できたということか。

回答:感染対策上の対応から時間外の練習時間を確保できなかったが、行事等の中止によりあいた時間を技術練習の時間とするなどの工夫により、例年と同様の成果が得られている。

質問:コミュニケーション能力の育成と感染対策は相反するように感じるがどう対応しているか。

回答:基礎看護学の授業において知識として学び、日々の学校生活や学内演習、実習の中で意識的に教育している。現在、学校生活においては感染対策防止のため密を避けるなどの指導を行っているため、グループ活動などを規制している状況がある。また、例年実習前には、ボランティアに患者役となっただけコミュニケーションの機会を作っているが、今年度はボランティアの感染防止を優先し行えていない。看護を実践するためには、患者から情報を得るためのコミュニケーションを身につける必要が

ある。学生の現状を見ていると、患者が発した言葉の意味を考えることができないなど、コミュニケーションに課題があると感じている。

評価：昨年度までのような運用であれば、時間外に練習したくてもできない学生もいたのではないかと思う。そのような学生への対応としても、時間外の個別練習だけでなく時間内に個別練習ができる機会を作ることが効果的と思われる。

OSCE や演習時、患者役を教員が実施したとのことだが、生活者として捉えコミュニケーション力を育成するためには、ボランティアを活用し感染対策としては距離をとったり、ZOOM を使用するなど工夫を検討されることが望まれる。また、人に伝えるためのコミュニケーションではなく、相手の話を聴き取るためのコーチングやアサーティブなコミュニケーションなど、医療的コミュニケーションの向上が必要であり、スキルとして磨いていく必要がある。

## 目標 I -2、看護の対象を「生活者」として捉える力の育成

### <取り組みと課題>

- ・昨年度、人間を「生活者」として捉えることを検討し、主要概念や期待する卒業生像に明記した。今年度は、各教員が担当する看護学の授業の中で、看護の対象を生活者として理解することを意識して教授した。
- ・特別なことではなく、日々の学生自身の行動(日常生活行動)や毎日の習慣から「生活」が成り立っていることを説明し、実習前研修や学内演習では、患者の入院前の生活の情報を意図的に提示したり、生活に焦点をあてて考えさせることで、臨地においても対象を「生活者」とし捉えることができ、学びの中に「生活者」というワードが出るようになった。
- ・教員個々が理解している生活者という考え方で教授活動を行っているが、今年度はカリキュラム担当者会議を中心として、教員全体で「生活・生活者」についてのディスカッションを行った。学校としての考え方について共通認識し、文章化した。
- ・それぞれが担当する講義・実習の場で、教員が意識して教授しているが、系統立てた教育ができる体制にはなっていない。今後は、科目間の関連性も念頭に学生の理解を促すような教育ができるよう取り組む。

### <質問と回答および評価>

質問：生活者という捉え方を実践場面にかすための工夫はどのようにしているか。

回答：実習前研修で入院前の 24 時間の生活や疾患が入院後の生活にどのように影響しているか考えさせるようにしている。しかし、実習では入院前の生活についての情報はとるが、その情報を活用することができていないため、今後も引き続き指導が必要である。

質問：系統立てた教育ができる体制、考え方の統一、一貫した教育とは何か。

回答：教員各々が生活者ということ意識し担当科目の教授を行っていた。学校として、共通理解できていなかったため何度もディスカッションを重ね、学校としての「生活・生活者」を明文化した。来年度に向けて、各担当している科目の授業内容の見直しや科目間の連携、実習要項内容への反映等に取り組んでいる。

評価：教員の関わりによって、看護の対象を「生活者」として意識できるようになったことは評価できる。学校が生活者について共通理解し統一した教育を行うとあるが、考え方を学生に提示した後、学生個々がどのように考えるかを問うていく必要がある。また、ボランティアの人々と接することにより、生活者を実感させていくという取り組みも大切であり、今後の取り組みを期待する。

### 目標 I -3、専門職業人としての自主・自律心の育成(主体性、倫理観、内省力)

#### <取り組みと課題>

- ・クラスでの役割遂行や実習グループでの活動、自治会活動や宿舎自治会活動など様々な場面において、教員が意図的な関わりを行っている。しかし、今年度は、学校行事が全て中止となったため、教科外の集団活動の機会を活用して育成に力を入れていた主体性については課題が残る。
- ・2年生が中核学年として、他学年に働きかける機会を設けるよう投げかけたところ、学生同士で検討し「チャレンジ活動」として計画実施した。しかし、継続的な活動にはなっていない。主体的に活動したい気持ちもある反面、自分の事を優先する傾向がある。
- ・倫理観については、授業の中で学んでいる。認識や行動として身につけるためには、日々の学校生活や臨地実習での行動において、教員が問題提起し考えさせる事が大切であり実行している。感染防止のための行動を説明し、幾度となく注意喚起していても行動抑制が効かない現状もある。その際は、事実を確認し振り返りの機会を作っている。
- ・臨地実習でのインシデントや学内での問題行動に対しては、タイミングよく振り返りの機会をもち専門職業人としての行動形成につながると考え行った。学生は、事実を一つ一つ確認していくことによって、自分の行動や他者への影響を考えることができている。
- ・感染対策を第1に考え、カリキュラム運営を行っているが、学生にとっての学びの機会を保障することが重要である。今後も、行事を中止しなければならないのか、感染対策を行った上で実施するためにはどのような工夫ができるのか検討していきたい。

#### <質問と回答および評価>

質問:臨地実習は通常通り行えたのか。

回答:老健施設以外は、施設に受け入れていただき実施できた。しかし、通常通りではなく学内実習を組み入れながら行っている。

評価:感染防止を考え教室を分散させたり様々な規制を設けることによって、学生の主体性や自主性を育む教育に影響がある。感染対策として、マスクの2重着用、手指消毒の徹底、体温チェックだけでなく、抗原抗体検査を実施するなど次年度に向けての新しい取り組みも必要ではないか。感染リスクを避けながら、教育の質を低下させないような工夫も必要である。学生には、医療従事者としての自覚をもたせ、自主的に考え実践するよう「感染看護学」のような教育も必要と考える。

### 目標 I -4、看護師国家試験合格率 100%達成

#### <取り組みと課題>

- ・1年次から国家試験対策を行っている。基礎知識の継続的な学習と模擬試験の定期的な実施により、既習知識の定着をはかることを目指している。また、3年生は模擬試験の結果等を基に強化学習対象者をピックアップし、時間外に集団指導や個別指導を行っている。
- ・全ての実習終了後、全教員協力の下、国家試験対策の補講を52時間実施した。
- ・昨年度は、1名不合格であった。解答チェックミスも考えられるため、知識の定着と共に凡ミスをなくするための対策についても指導している。
- ・臨地実習で体験し知識や技術として習得できる内容が多くある。臨地実習の実施は今後もある程度の制約があると思われる。学内実習・演習内容の更なる工夫が必要と考える。

#### <評価>

- ・国家試験の全員合格に向け取り組み、成果を出している。

## 学校目標Ⅱ 教育の質向上を目指した教育環境の整備

### 目標Ⅱ-1、よりよい教育を行うための教職員のチーム力の向上

#### <取り組みと課題>

- ・担任制をとっている。学年主任を決め、リーダーシップの発揮を求めている。また、各学年担任の中で、カリキュラム担当と実習担当として業務分担している他、学年内の役割分担を行い教育にあたっている。
- ・経験年数や経験内容、期待する役割から担任の組み合わせや業務割り当てを決めているが、実践能力の違いによる業務量の偏りが生じている。学年内では連携・協力しているとともに、実習指導や技術指導においては、学年を超えた協力が出来ている。
- ・今年度は、感染防止対策を講じた上での学習環境の整備が求められ、様々な取り組みを行った。各自が身につけている知識や技術に差があるため、全教員が同じような行動をとる必要はないが、協力や連携が十分ではなく一人の負担が大きくなる状況があった。
- ・限られた人員で効果的に教育を行っていくためには、一人一人がバラバラと行動するのではなくチームとしての協力体制を構築する必要があると考え目標を設定した。しかし、「チーム力」とは何か、その力を発揮するための具体的取り組みの検討に至らなかった。
- ・教務助手、事務助手と役割分担や連携体制をとっている。情報伝達の不備等による問題発生に対しては、その都度、対応を考え修正できた。
- ・教員個々の強みをいかせるような役割分担をすることや状況を見ながら臨機応変に役割変更を行い、チームとして協力することが当然のこととなるような仕掛けについて検討する必要がある。
- ・全体として、状況を見極める力と発信力、柔軟な対応力、互いを尊重した関係性の構築が必要である。

### 目標Ⅱ-2、看護教員能力開発プログラムを活用した教育実践能力の育成

#### <取り組みと課題>

- ・今年度から、全国国立病院附属看護学校副学校長・教育主事協議会で作成した「看護教員能力開発プログラム(TNAD)」に則って、キャリアアップを目指している。
- ・目指す内容が具体的に示されているため、能力開発の指針となり自己の課題に取り組んでいる。今年度の最終面接により達成状況の確認を行い認定していく予定であるが、各段階の学習・実践内容が多岐にわたるため、修得すべき能力と到達目標を十分に認識できるような機会を作る必要性を実感している。

### 目標Ⅱ-3、効果的な教育を実践するための取り組み(授業研究、研究)

#### <取り組みと課題>

- ・今年度は、全員の授業研究を行った(14名)。コロナ禍で遠隔授業を実施したため、授業研究の計画の中に遠隔授業について全員でリフレクションする内容を追加した。
- ・初めての試みであった遠隔授業については、授業内容、資料作成、動画作成、課題提示および評価について意見交換を行い共有することで、自己の課題や今後の自己の配信授業における課題を明確にすることができた。
- ・自作の動画を用いた講義について授業研究を行った。動画を使って説明を行うことで強調したい点を何度も視聴できる。学生が個別練習の時にも技術を確認しながら行うことができた。
- ・コロナ禍での授業形態や実習方法の変更などに追われる状態となったこともあり、研究時間を捻出することが困難であった。国立病院総合医学会(Web開催)に2題登録。現在3チームが研究に取り組んでいるが十分な時間確保ができていない。

・講義や演習に関する授業研究は実施できており、それぞれ課題が明確になり授業改善に役立っているが、今後は、実習指導に関する授業研究にも取り組む必要があると考えている。

#### 目標Ⅱ-4、実習施設・実習指導者との連携による実習指導の強化

##### <取り組みと課題>

・実習指導者講習を受講していない実習指導者に対し、実習指導者研修を実施した。現代の学生のレディネスの理解、実習指導を計画的に意図的に行うことや実習評価等についての理解することが出来たという反応があった。

・実習指導者会の年間計画を立案し、母体施設とは毎月実習指導者会議の中で実習指導に関する意見交換を行った。学生のレディネスを把握するための演習への参加や実習での学びや学生の成長を確認し指導に関する振り返りをするための実習まとめ会への参加も意図的に実施した。学生の問題点だけでなく、指導者自身の関わり方などについて振り返る機会となった。

・学内実習に変更となった実習については、実習目標達成のためにどのような内容や方法が適切なのかについて、実習担当者と実習調整者(実習担当教育主事)が中心となり指導案を作成し、実習担当者会議や教員会議で検討後実施した。

・臨地での実習期間や時間は減少したが、実習指導者との連携・協力により技術の経験については、昨年度と同じ程度の経験は出来ている。しかし、到達度の評価は「一人で出来る」割合が減少している。

・コロナ禍で実習施設の変更や実習時間・方法の変更を余儀なくされた状況下ではあったが、学習の保障ができるよう実習施設や指導者と随時調整を行った。

・実習施設や実習方法の変更に伴い、随時、教員の指導体制を変更し対応した。学生のカリキュラム評価については、昨年と大きな差は出ていない。

・コロナ禍で実習施設からの受け入れが困難となった段階で学内実習への変更を行い対応した。変更した学内実習や評価方法や評価内容の検討を行ったが、検証が必要である。

・次年度に向けどのような状況にも対応できるよう、各科目の臨地実習を学内実習に変更した場合の実習方法や評価方法について検討しておく必要を感じ取り組み始めた。

#### 目標Ⅱ-5、社会のニーズに対応した教育内容の抽出と実践

##### <取り組みと課題>

・当校は令和4年度末に閉校となるため、第5次カリキュラム改正には該当しないが、カリキュラム改正の意図を踏まえカリキュラム担当者会議を中心に教育内容の見直しに取り組んでいる。

・教員全員が授業研究を実施し意見交換を行っている。意見交換では、自己の課題についての振り返りと共に社会のニーズを踏まえた教育内容を反映できているかについても議論した。

・各自が授業評価を行い、第5次カリキュラム改正において提示されている能力の育成(コミュニケーション能力、臨床判断能力、多職種連携・協働能力、多様な場で療養する対象者(生活者)を理解し健康支援する能力、情報通信技術(ICT)の活用能力)を視野に、課題や他科目との関連を振り返り、教育内容や方法の見直しを現在進行形で行っている。

・学生の背景や卒業生像から、これまで行ってきた教育方法が果たして次世代を育成する上で妥当であるのかを検証し、改善する必要がある。

## 目標Ⅱ-6、教材教具の整備と効果的な活用

### <取り組みと課題>

- ・コロナ感染症拡大による休校期間があり遠隔授業を実施するための設備を整えた。また、対面授業の開始に合わせ感染防止対策として、2つの教室に分かれて授業をするようにした。1つの教室で行っている講義をビデオ撮影し、ケーブルでつないだもう一方の教室のテレビモニターに映像を流すことで、学生の密を避け授業を実施することができた。
- ・教室内にインターネット環境を整備し、同時双方向型の遠隔授業実施に向けた準備を行った。現状は、対面授業が実施できているため活用はしていない。
- ・臨地実習が学内実習に変更になったため、学内実習においては視聴覚教材の活用が有効と考え、必要なものを購入整備した。
- ・感染対策上時間外の教室使用を制限したことにより、自主的な技術練習時間を十分確保することが困難となった。教材の貸出を行い自宅で練習できるように工夫した。
- ・施設の老朽化により使用できない設備や古い教材教具の廃棄等が出来ていない現状がある。来年度から2校が兼用するため管理状況をより明確にしておく必要がある。

### <評価>

- ・令和4年度末に閉校となっているが、必要な教材教具の整備は適切に行っている。

## 目標Ⅲ-1、休学者および中途退学者の減少

### <取り組みと課題>

- ・年間計画を立て、学生個別面接を実施している。また、希望者や教員が気になる学生(身体的・精神的・学業成績低迷等)は随時面接指導を行っている。また、必要時には、スクールカウンセラーによるカウンセリングを勧めたり、保護者への情報提供や情報収集を行い指導に反映させた。
- ・休学や退学については、学生本人の意思を尊重すると共に、看護師としての適性を見極め保護者とも面談することにより最終決定をしているが、学校としての考えを理解していただくことの困難さを感じている。
- ・今年度は、休学者1名・退学者4名であり、昨年度より減少している。

## 目標Ⅲ-2、大阪府内施設への就職率の向上

## 目標Ⅲ-3、機構施設への就職者の確保

### <取り組みと課題>

- ・当初は、大阪府下の就職希望率は8割を超えていたが、施設の運用状況の変化により採用予定数の変更があり不採用となった学生が多かった。その後、他府県へ就職となったため大阪府下の就職率は74%と減少した。施設の採用状況を早期に把握すると共に、学生への情報提供をタイムリーに行う必要がある。
- ・2年次より個別の就職面接を行い、学生の希望を把握すると共に、学生の状況に合っているかを話し合い指導にいかしている。
- ・入学時より、帰属意識醸成にむけた関わりを行っている。機構附属の学校であるため機構施設への就職について考える機会を意図的に作っているが、それぞれの学生の背景等から機構外の施設を選択する学生も多い。また、昨今機構施設の採用数も減っており、機構就職者を確保することが困難になってきている。

## 【講評】

- ・新型コロナウイルス感染症の中、看護教育の質の低下をさせないという努力が、自己評価内容や意見交換での発言内容から感じられ、すべきことはしているという印象であった。
- ・コミュニケーション能力、主体性などの能力を育成できる機会が、今年度新型コロナウイルスの関係でなくなったと言うことだが、感染対策を講じた上での SP の活用(Web 活用)など、今後は新型コロナウイルス感染症がある中で、できる方法を考え教育に当たってほしい。
- ・次年度は 1 年生が在籍はしないが、学生がどこまで到達できているか、個別の状況をみながら指導をしていく必要がある。
- ・学校行事が全て中止となり、学校内での学生の交流、学校間での学生の交流がなかったが、こちらについてもできる方法で交流の機会を作り、学生の自主・自律、主体性の力を育成していく必要がある。
- ・遠隔授業(配信授業)を実施しているが、実施後の学生の反応がどうだったのかお聞きしたい。
  - 学生の反応については、アンケート調査を実施した。
    - ・アンケート結果では、配信授業についてよかったと思うこと、困難だったことに関する意見があった。
    - ・良かった点については、今回の配信授業では、授業の資料・課題・質問用紙を予定されている授業の 2 日前に配信していたが、学生の中には自分で学習計画を立て、こちらが作成した時間割の講義日程よりも先に学習に取り組む者もあり、自分で計画的に学習に取り組むことができたと回答している者がいた。また自宅学習となるため、通学時間が学習時間になった、自宅という快適な環境の中で学習ができた、コロナ感染への不安が大きく、通学せずに学習ができることが良かった、質問に対する回答があるので、理解が深まったなどの意見が聞かれた。
    - ・困難だったことについては、普段対面授業で講義を受けており、講師の話聞いて分からないなと思ったときに周りの学生の反応を見て、みんなも同じだと思っていたが、自分一人での学習となり、周りに同級生がいないので、自分一人がわかっていなかったらどうしようと思う、自分一人で理解することが難しかったなどの意見が聞かれた。
- ・2 年後に閉校となる学校だが、教育に必要と思われる教材教具の購入や設備整備に関しては、しっかりと行われ対応されている。閉校となることは非常に残念であるが、引き続き教育に尽力されたい。